



選択的シングルマザーと女性の自己決定権 : 彼女たちは本当に自己選択をしたのか

周, 馨驥

(Citation)

社会学雑誌, 41:225-246

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503821>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503821>



《投稿論文》

選択的シングルマザーと女性の自己決定権

——彼女たちは本当に自己選択をしたのか——

周 馨 驥

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程

本論文は、選択的シングルマザーという女性の新しい生き方に注目し、現代社会における女性の自己決定権の意味を再検討した。「選択的シングルマザー」（英語：single mother by choice、略称SMC）とは、自らの意志で結婚をせずに子どもを産むことを選んだ女性をさす。日本社会において、シングルマザーは差別的なまなざしにされ、女性の生き方として選択しがたい状況にあった。しかし、選択的シングルマザーの登場とともに、シングルマザーという生き方が可能になってきた。本稿では、インタビュー調査法を用いて、三人の調査対象者の語りを①反省、②決断、③実現、④再帰的思考という流れで分析したうえで、いかにして選択的シングルマザーとしての生き方が可能になるかという過程を考察した。それによって、選択的シングルマザーは単に女性の欲望から生まれるのではなく、社会通念や制度による女性の自己決定権への抑圧に対する抵抗として生まれてきたと考えられる。一方で、語られ方には「貫性に欠けることを明らかにした。それは「経済的自立の上での情動的な選択」「育児の自己責任化の強化」「押し付けられた母親役割から脱却する」という三つの点に示されている。

一 はじめに

一九七〇年代のウーマンリブ運動以降、女性の自己決定権の思想は普及している。にもかかわらず、日本の女性が選択の困難に陥る現実には面せざるを得ないことが指

摘されている（江原、二〇二二）。女性を取り巻く環境が厳しいなか、女性たちは新しい生き方―「選択的シングルマザー」―を創った。「選択的シングルマザー」（英語：single mother by choice、略称SMC）とは、自らの意志で結婚をせずに母になることを選んだ女性のことである。あ

たかも「産むか産まないかは私たちが決める」と高声で叫んだリブの女性たちの光景が目につくようである。

しかし、日本では「貧困な」シングルマザー像が根づいている。母親の貧困は子どもの貧困をもたらしことが社会一般の認識とされているため、シングルマザーは問題視されている。あえてシングルマザーになったのは賢い選択とは言えない。なお、こうしたシングルマザー像は、マスコミで『特別な女』としてのぞき興味でとりあげたり、あるいは『子殺し、子捨て』と強引に結びつけたり、『ふしだらな無責任女』というレッテルを貼り、ふつうの女の生き方とは無縁の存在にしようとする（池上、一九八二・一六三・一六四）報道によつて形成されてきたことが指摘されている。シングルマザーは様々な言説によつて女性の生き方から排除される。それでは、選択的シングルマザーはいかにして新しい女性の生き方として可能にしたのか。

このような問題意識に基づき、本稿では、選択的シングルマザーを選ぶ女性を対象者とし彼女たちの語りによつて、いかにして選択的シングルマザーとしての生き方が可能になるかという過程を考察していく。そのうえで、現代社会において女性の自己決定権のもつ意味を検討してみる。

二 問題の背景と先行研究

日本でシングルマザーに関する研究が盛んだが、その多くが貧困（階層）という文脈で論じられる。江沢あや・鈴木玲（二〇一八）によれば、シングルマザーが家族を養えるだけの賃金を得るのが困難であることは、女性を中心とした非正規雇用の増加と部分的に関連している。日本のシングルマザーの就業率は他の先進諸国と比較して高いが、女性が低賃金のため世帯収入は一般世帯の三割と低い。離婚による母子世帯の貧困の要因には、女性が結婚・出産による退職後に常勤職に就くことが難しいという就業構造があると指摘されている（神原、二〇〇七）。

このような文脈では、はじめから自分の意思でシングルマザーになる女性が不可視化されている。にもかかわらず、『自分の意志で未婚の母を選択した』（池上、一九八二・一六四）女性が実在している。早くも一九八〇年代に池上らはそのようなタイプのシングルマザーに関心を寄せた。未婚の母に対する偏見があまりにも根強いいため、「当の彼女たち自身、あえて、未婚の母ですと公言しようとはしない」（池上、一九八二・一六四）と指摘されている。池上らは北條れん子をはじめとする自分の意志で未婚の母を選択した十人のシングルマザーの手記を集め、彼女たちの生と性の経験や生きづらさを忠実に記述している。そ

これらの手記を踏まえて、未婚でシングルマザーを選ぶ女性は「特別の女」ではなく、また、個人が充足の生を求めれば求めるほど、そんな生を選択のひとつに「未婚の母」がある主張した(池上、一九八二)。おそらく、ここではじめて日本のシングルマザーがポジティブなイメージで語られただろう。

偶然であるが、ほぼ同時に、世界初の選択的シングルマザーの団体がアメリカで発足した。J. Mates は選択的シングルマザーの第一人者として広く知られており、一九八二年に当事者団体である「SMC (single mother by choice)」を作り出した。アメリカ社会でも、シングルマザーは貧困の世代間連鎖に関与しているとして、しばしば攻撃にさらされており、特に若いシングルマザーには「怠け者で消極的 (lazy and unmotivated)」、「セックスに対して無責任 (sexually irresponsible)」、「低年齢 (young)」(Book, 2000: 63) といったレッテルが貼られる。それに対し、選択的シングルマザーは自らの正当性を示すために、まず、シングルマザーに押しつけられるレッテルに抵抗し、価値序列で自分のことを「シングルマザーのヒエラルキーのトップ」に位置づけると指摘されている (Book, 2000)。また、戦略として、選択的シングルマザーは「年齢 (Age)」、「責任感 (Responsibility)」、「精神的な成熟度 (Emotional maturity)」、「経済的自立 (Fiscal capability)」とこの個人的

なパーソナリティーを社会的期待と結びつけることによって、シングルマザーになるという決断を正当化させるための準拠枠を作った。

また、アメリカでの選択的シングルマザーの決定過程を明らかにした Hertz (2006) によれば、女性たちが、選択的シングルマザーになることを計画する期間には五年から八年ほど必要であることが、また「通過礼儀 (Liminality)」という人類学の用語を取り入れて、その決定過程をあらわし、その過程において、女性は「想像 (imaging)」し、「秘密のテストを受け (Testing the Secret)」、「きっかけとなるイベント (The Catalytic Event)」を経験していたことが指摘されている (Hertz 2006: 24-35)。

日本については、二〇〇六年に掲載された未婚の母に関する論文で「選択的シングルマザー」という言葉がはじめて使われた。C. Wright は、一九九八年八月から一九九九年六月にかけて、関西地方に住む十七名の未婚母を対象として、インタビュー調査を実施した。彼女たちの声を聞く中で、Wright (2006) は、未婚の母は、西洋の学術的な議論において選択的シングルマザーと呼ばれるが、個人が未婚でシングルマザーになることを積極的に意図していない可能性があることを否定できないと考えた。そして未婚の母としての経験は、完全に社会的かつ外部的なものでも、完全に個人的または主観的なものでもないため、両方の

側面を検討する必要があると考える。つまり、未婚の母のライフコースは「選択的シングルマザー (single mother by choice)」や「デフォルトシングルマザー (single mother by second choice or single mothers by accident)」^(*)「予想外のシングルマザー (single mothers by accident)」と三つに分けられると述べている (Wright 2006)。選択的シングルマザーは、日本社会における家族の規範的言説、特に日本の戸籍制度の抑圧的な側面を積極的に拒否した。それとともに、彼女たちは自分たちの「伝統的な」家族も拒否した。他方で、未婚で育児することは彼女たちのアイデンティティの重要な一部になったが、母性に関する規範的な考えを否定することはなかった。(Wright 2006)。

日本で、「選択的シングルマザー」という言葉を目にするようになったのは、二〇一五年五月にオルタナSに掲載した記事『「幸せは人それぞれ」——選択的シングルマザーという生き方⁽³⁾」である。そこで、日本で唯一のSMCを研究・情報提供している「SMCネット」⁽⁶⁾を運営する「女性と子育て研究所」による連載がスタートした。女性と子育て研究所では妊娠前からシングルマザーとなることを計画したタイプを「選択的シングルマザー (SMC)」と定義している。

その記事は反響を呼び、テレビなどでも大きく取り上げられるようになった。たとえば、二〇一八年、フジテレビ

のドキュメンタリー番組『ザ・ノンフィクション』では、「選択的シングルマザー」を追った『あっちゃんと翔平』が六月一七日に放送された。「選択的シングルマザー」がネットで大きな話題になったのは、二〇二〇年一月一二日タレントの最上もがさんが自身のブログで第一子妊娠を発表したときである。この発表に対して、Twitterでは、一万件を超えるリツイートと四万件を超える「いいね」が集まった。しかし、SMCの実態は取り上げられているより複雑で、多様な理解が広がっているのが実情である。

選択的シングルマザーという言葉の浸透にともない、「選択的シングルマザー」というタグを用いてSNSで発言する人々がたくさん見られるようになった。本稿で用いるデータはSNSで発言する選択的シングルマザーの語りによって得られたものである。それらの人々はフェミニストであることを自らで否定した。また、彼女たちは必ずしも「SMCネット」のメンバーと限らない。そのため、本稿では、Wrightが用いた言葉と「女性と子育て研究所」での定義を区別し、「選択的シングルマザー」を、パートナーをもっているか、また、計画を立てるタイミングを問わず、自らの意志で結婚をせずに子どもを産むことを選んだ女性のことと定義する。

選択的シングルマザーとシングルマザーとの関係は切っても切り離せない。しかし、日本における選択的シングル

マザーが、アメリカでの選択的シングルマザーのように、自らを「シングルマザーのヒエラルキーのトップ」に位置づけるか否かについては、さらに検証しなければならない。また、Wright (2006) は、彼女たちは結婚規範や家族規範に意識的に抵抗した一方で、社会的に期待される母親役割に同調していると指摘している。しかし、女性が一人で出産、育児を選択することは母親役割に従うことと同じと言えるのか。これらの点について、これまでの先行研究ではあまり関心が払われていなかった。さらに、日本の文脈において、シングルマザー自体より、シングルマザーの貧困の問題しか注目されていない。確かに、シングルマザーは貧困をはじめとする様々な困難に直面せざるを得ない。それは、シングルマザーとしての問題ではなく、むしろ付随したものと言える。本人たちにとって一人での出産、育児はどのような経験であるか、どのような意味をもつか、それらの問題に対してあまり関心が払われなかった。したがって、本稿では貧困というフィルターを外して、シングルマザーをみるにより、選択的シングルマザーという新しい選択肢を提示する。

三 研究方法——半構造化インタビュー調査

三・一 調査目的と対象

本調査の目的は選択的シングルマザーという生き方を選んだのはどのような人間であるか、また、どのようにその生き方を選んだのかということを知ることである。そのため、三人の選択的シングルマザーに半構造化インタビューを行った。

インタビュー対象者については、まず選択的シングルマザーのことを隠さずに、本を出版したり、番組に出演したりしている方に連絡をとった。具体的には、SNSでそれらの方々のアカウントを探し、DMにて研究のため、インタビューを依頼した。このようにして、AさんとBさんという二人の協力者を見つけた。同意を得たうえで、Aさんには二〇二二年一月五日、Bさんに二〇二二年二月五日にインタビューを行った。取材を受けたことがあるこの二人と異なり、もう一人の西川智子さん（以下は西川さん）は取材の経験がなかった。また彼女は論文のなかで匿名ではなく、実名を公表することを望んでいた。そのため、本論文では三人目の選択的シングルマザーの協力者は実名で表記している。西川さんにインタビューを行ったのは二〇二二年六月一九日である。インタビューをする際にZoomアプリの録音録画機能で、

会話を記録した。インタビュー時間は一時間から二時間程度である。

三・二 調査対象者

三・二・一 Aさん

Aさんは一九八二年に生まれ、性別自認は女性で、性的指向は異性愛である。二〇一八年に、Aさんは子どもの生物学的な父親、すなわち、現在のパートナーに出会った。その年、AさんはPR会社を起業した。恋人がいてもシングルマザーになる決心は変わらなかった。なぜなら、三五歳をこえ、出産リミットが迫ってきたからである。Aさんは養子縁組に関する情報を調べたが、日本の法律では、シングル女性が未成年者や乳幼児と養子縁組することが困難であることがわかり、Aさんは養子縁組の利用をあきらめたが、「産んでみたい、育ててみたい」という気持ちは変わらなかった。

一方で、Aさんは子どものことがよくわかっていなかった。にもかかわらず、妊娠したと告げられたとき、産まなければならぬと思わなかったと言った。というのも、お腹に「人がいる」ことがわかった後、「その人」を真っ暗な子宮の中から出してあげるの「わたし」しかないと感じていたからである。しかも、好きな男の遺伝子を残せばよいという考えもあった。妊娠が分かった瞬間に、Aさ

んは一人でその子を産むことにした。

三・二・二 Bさん

Bさんは一九八六年生まれのシングルであり、性別自認は女性で、性的指向は異性愛である。二人の子どもをもち、会社経営や輸出、投資、子ども支援など幅広い分野で活躍している。年収は一〇〇〇・一五〇〇万円である。二〇〇八年に大学を卒業し、二〇一四年まで言語聴覚士として、六年間現場で働いた。たくさん親子をサポートしていくなかで、子育ての楽しさを強く感じ、自分も経験してみたいという欲求が強まった。そこで、「せめて三〇歳までには子ども一人がいる」というプランニングをした。

二七・二八歳の時に、結婚したいと思える相手に出会った。しかし、結婚には至らなかった。Bさんのほうが別れを切り出したらしい。その後、長男の生物学的父親に出会い、交際した。しかし、三〇歳、三一歳を超え、Bさんは焦っていた。なぜなら「出産リミット」が迫っており、年をとるにつれ、妊娠もしにくくなると感じていたからである。Bさんは当時交際している相手に「協力してほしい」というお願いをした。一度は反対されたが、最終的に協力してもらった。「思いつてから行動するまで、一週間しかかからず」、一回のトライで子どもを授かった。

そして、二〇一七年一二月に長男を出産した。そこから、選択的シングルマザーの生活が始まった。三年後の二〇二〇年一二月に次男を出産した。二人目の子を産むと決めたときは、海外の精子バンクに行く計画を立てたが、コロナの影響で行けなかった。周りの人に「第二子欲しいんだけど、誰か精子提供してくれる人いないかな」とひたすら声をかけた。二〇二〇年に仕事関係で知り合った男性から精子提供を受けた。一回目と同じように、一回のトライで妊娠した。現在、Bさんは二人の息子と三人で過ごしている。

三・二・三 西川 智子さん

西川さんは一九八五年生まれのシングルであり、性別自認は女性である。性的指向を聞いたとき、異性愛者と無性愛者で少し悩んだが、異性愛者を選んだ。思春期を経て、二〇代に二つの恋愛を経験した後、結婚、出産に対し嫌な印象を抱くようになった。

二〇代後半に入ったとき、周りには結婚や出産をする人が増え、自分も焦るようになった。そもそも結婚願望がないにもかかわらず、焦ってしまった。「このままずっとだから一人にいるのどうなんだろう」と思っていたとき、西川さんの親友の一人が子どもを産み、そのお祝いに行った。それがきっかけで、西川さんははじめて子どもが可愛

いと感じ、子どもがほしいという欲求が起こった。そして、アプリで婚活をはじめた。

二七歳のとき、アプリでマッチングした男性と交際した。しかし、彼と付き合えば付き合うほど、もやもやができてしまったら、その人と一緒にいる理由はなくなくなっちゃうじゃないですか。」そう気づき、婚活をやめ、他の方法を探そうと考えた。婚活にもやもやしていた二八歳のとき、西川さんはインターネットで選択的シングルマザーに関する記事を読み、はじめて「選択的シングルマザー」という言葉を知った。そこから、婚活を完全にやめ、妊娠に取りくんでいった。体外受精では、一回数個の移植可能な受精卵を作ることができる。西川さんの場合、三個できた。その後、子宮に移植し、妊娠した。九ヶ月後の二〇二一年五月に出産日を迎えた。しかし、逆子であったため、帝王切開をせざるを得なかったが、無事に女の子が生まれた。

表 1 調査対象者の基本属性

名前	A さん	B さん	西川智子さん
生年	1982 年	1986 年	1985 年
学歴	大卒	大卒	大卒
職業	経営者	経営者	正社員
年収 (万円)	回答なし	1,000 ~ 1,500	700 ~ 1,000
性自認	女性	女性	女性
セクシュアリティ	異性愛	異性愛	異性愛
現住所	東京都	北海道	兵庫県
結婚の経験	一回離婚	なし	なし
妊娠するアプローチ	性交渉	性交渉	精子バンクの利用
出産の年齢	38 歳	31 歳	35 歳
子どもの人数	1 人	2 人	1 人
子どもの生年	1 人目	2020 年 6 月	2017 年 12 月
	2 人目	なし	2020 年 12 月
他の同居の家族	男性パートナー	なし	なし

四 選択的シングルマザーの語りとその分析

過去にも自分の意志で未婚の母を選択した女性が存在していたが、「未婚の母です」と公言しようとはしなかった。それに対し、今回調査した選択的シングルマザーたちは、「選択的シングルマザーです」と公言した。ここにかかなり大きな時代の変化が見られるのではないだろうか。また、選択的シングルマザーという言葉に様々な女性の経験が凝縮されている。本稿では、調査対象者の語りを、①反省、②決断、③実現、④再帰的思考という流れで分析する。

四・一 反省…過去の経験から

調査対象者たちは、選択的シングルマザーを選んだ理由を語るときに、過去の経験を反省しながら語っている。そのためあえて「決断」の前に「反省」を加えた。

四・一・一 Aさん…以前の結婚

筆者…インタビューのご協力をお願いしたときのやり取りで A さんが自分の事情はちよつと違うと言っていました。インタビューはそこからはじめてもいいでしょうか。

A …実は私もとシングルマザーをやろうと思っていたわけではなくて、若い頃一回結婚もした

四・一・二 Bさん…専業主婦の母親

筆者… Bさんは、どのような家庭で育てられてきたのでしょうか。

B … 私は両親が揃っている家族です。うちの両親は仲が悪かったですよ。私の父親はサラリーマンで、転勤がある仕事でした。私の母は専業主婦……引越しが多かったのです、私の母親は働けなかったわけですね。あまり子育てに父親がす

ことがあつて、その時は、子どもができる前に旦那さんのDVが始まっちゃって、暴力で離婚しました。私の二四の時に。そんな経験もあつて、最初はただ普通に結婚して、普通に家庭を築くつもりでいたわけですよ。結果的にそうなっちゃって。そこからあまり家庭に対して、いい印象もなくなっちゃって、仕事はそこからバリバリやりだすこともあったから。正直に結婚しない方がいいと思って、十年ぐらいずっと思っていたのです。たまたま、年齢はだんだん三五をこえたぐらいから、女性として産めるものなら産むという経験してみたいというようにな、だんだんリミットが迫ってきたらと思うようになって。

ごく熱心にかかわってきたことはなくて、ただ、ある程度成長したらわかることは、もちろん経済的には支えてもらっていた。……子どもは、父親がいなくても育つというふうに、私が自分の家庭で思ったと思います。しかも、私の両親がとても仲悪かったのです、その姿を見るのはすごく嫌いだっただすよ。

筆者… なぜでしょうか。

B … ……私の母は今年（二〇二二年）六八歳になるので、それぐらいの世代はやはり女は結婚することが普通である、結婚したほうが幸せになれるみたい価値観です。一〇年勤めていたけれども、

四・一・三 西川さん…私本当に結婚したいのかな

筆者…以前付き合っていた相手と結婚したかったことがあります。

西川…一人目のとき、全然したくなかったです。全く願望はなかったですね。

筆者…マッチングアプリで出会った二人目の相手と結婚する気もなかったのですか

西川…そうですね。この人となら、一緒に生活できるかもしれないって思っただけですけど、でも、私本当に結婚したいのかなと思っただけという気持ちもやもやずっとあって、結婚したいって私が思っている理由は何かなって考えたら子どもということで、じゃあ、もし子どもができたあと、その人と生活を続けていく努力ができるだろうかと思ったら、多分無理だっていう結論に至って、お別れを。

四・二 決断…情動的に決めた

四・二・一 Aさん…「迷うことはなく、じゃあ、一人で育てる」

A ……たまたま妊娠が発覚して、ただ先に言ったように結婚はできない状態だったので、私はまったく迷うことはなく、じゃあ、一人で育て

るから「オーケーです」たいな感じで、産む選択をして……

筆者…恋人と付き合っているうちに、シングルマザーになろうと決心した瞬間はあります。

A ……三五歳すぎたぐらいから、年齢的に、産める時期が限られてきたなあというふうに思い始めて、子どもを産んでみたり、育ててみたりという経験を、せっかく女性に生まれたから、してみたいなあという好奇心ですね……

四・二・二 Bさん…せめて三〇歳に一人の子どもがいるとプランニング

筆者…長男の生物学的お父さんは元付き合っていた人ですね。妊娠するまでに、子どもを産むことを計画したことがあります。

B ……彼はもともと結婚願望がなかったです。結婚したいという気持ちはなくて、お互い好きでしたけど、私もその人と結婚したいと思ってなかった……私も独立をして、じゃ三十歳、三十一歳を超えたことだから、もうそうだったら、やっぱり自分自身が妊娠できるかどうかにも気になってくるし。子ども欲しいなあと思っても、じゃ相手はどうすると思ったときに。一番簡単だっ

たからですよ、その時の相手が。どうせ自分が好きな人の子どもを産めたらいいと思うし、……彼にも、こんなことすぐできないよって言いながら、お願いしたら一回でできたんですね。

筆者… 先の話の中で、年齢にもふれたと思います。三十一歳のとき、そんなに気になりましたか。

B … 子どもを産めるのは四〇歳までぐらいかなと思っていました。やっぱり若い時というか、三〇歳までに一人を産みたいとなんとなく思っていたので。せめて三〇歳に一人（子ども）いるだろうなあ、自分のプランニングだったんですけど、まあ、結婚もしていないし、三〇歳を超えちゃったし、あれ……三十一歳の誕生日を超えて、今から作っても、えー、産むとき三二歳とか、思ったら、三十一歳の時焦りでしたよね。

四・二・三 西川さん…「友たちの子どもは本当に可愛くて」

筆者… なぜ子どもが欲しいですか。

西川… 二〇代の前半の頃、子どもも欲しくないし、結婚の魅力も感じていないという時期がありました。不思議なことで、二〇代の後半になったときに、すごく仲が良かった友だちが妊娠して

出産したんですね……友たちの子どもは本当に可愛くて、そのときに、選択的シングルマザーという選択肢がパツと出た時に、子ども欲しい、産んでみたい。

四・三 実現…多様な主体の関与

ここでの「実現」は出産と育児という二つの意味がある。すなわち、一人で子どもを産むことと、一人で育児をすることである。

四・三・一 Aさん…パートナーとシングルファザーの友人、保育園

Aさんは意図的にパートナーの協力を求めたことはないが、自分が妊孕力をもつか否かについては産婦人科で調べたことがある。四・二・一ですでにAさんは三五歳を超えたときに、出産や育児の経験への好奇心があることを語っている。つまり、妊娠は予想外ですが、Aさんは産める身体を整え、出産や育児を実現させる機会を待っている。偶然ではあるが、パートナーはその機会を作った。Aさんのケースでは、結果的にAさんが選択的シングルマザーになると決める過程において、不可欠のピースとなる。出産にはパートナーが関与しているが、育児にはパートナー以外の関与者が存在する。

筆者…子育てはどうやっていますか。

A …パートナーは子どもが大好きなので、子育てはパートナーもちゃんとやっていると思います。子どもの面倒に対して、半々分担しているような気がしますよね。金銭面というと、ここはちよつと特殊なんですけど、九割が私かなというふうに思っています。

筆者…支援を利用していますか。

A …サポート、NPOとかないですね。日本の行政がすごいというのは、母子手帳があるじゃないですか、妊娠したらお届けを出す、子どもを産んだらお届を出す。その時に、区役所はすごく気を遣ってくれて、私の住んでいた場所だったら、その場所の保健所とか、連絡してきたりするんですよ…シングルファーザーの友人がいて、私はその人のお嬢さんを幼稚園までお迎えに行ったり、逆に私が仕事中にその人が子どもの面倒を見てくれたりというような協力関係というのは何人かいますね。

私の場合は、女性経営者のシングルマザーということで、仕事しないと、会社は困っちゃうというのがあるから、保育園に優遇して入れるん

ですよ。なので、私は、子ども五ヶ月から入れたので、今も朝から晩までずっと子どもは保育園でみてもらっているので、私は仕事に集中できるという感じですね。

四・三・二 Bさん…元彼氏や精子提供者、両親、幼稚園、保育園、家事代行

前節でBさんは元彼氏の協力で妊娠したことに触れたので、ここで引用を省略する。そして、精子提供者については、「長男と次男の父親が違う」と語っている。また、二人目の子どもをもつと考えたとき、海外に渡航し精子バンクを利用して子どもを産むと計画したが、コロナ感染拡大の影響で、実現できなかつた。日本で知人を通じて精子提供者を探すことになつた。

両親の育児へのかかわりについて、「両親近く住んでいます、週二回ぐらい、お迎え行ったり」と語っている。幼稚園、保育園、家事代行については、以下のように語っている。

筆者…Bさんの一日を教えてください。

B …この子（次男）は九時半に保育園に行きます…十時ぐらいから今度上の子の幼稚園は始まる。上の子どもの幼稚園は、とても珍しいタイ

ブですけれども、親子も通う幼稚園ですよね……ナースリーではついていないので、私が二時ぐらいまで、ご飯も一緒に食べて。この後、私が大体午後三時ぐらいから仕事を入れることが多いので、私が仕事をしている間は、上の子は学童保育、英語のナースリー入っていて、そこで六時半まで見てもらえるんですけど、その間に大体三時間私は仕事をしていて、六時に下の子をお迎えに行つて、六時半に上の子のお迎えに行つて、七時前ぐらいに帰宅。私は家事一切しないので、家事代行、ヘルパーですね、料理を作ってくれる方にストックをお願いしているんですよ。週に二回ですけど、作ったおかずが冷蔵庫に入っているの、そこから分けて、夕飯を食べて。

四・三・三 西川さん…精子バンク、病院、保育園、両親
精子バンクの利用と病院の仲介について、以下のように語っている。

筆者…はじめて妊娠するまでのいきさつを教えていた
だけではないでしょうか。

西川…体外受精です。

筆者…日本でやっていましたか。

西川…海外のバンクを使ったときに、そのバンクの担当者の人が私に日本でこのクリニックだったらやってくれますよって教えてくれたのですね。もちろん購入することは前提に情報の提供だと思えますけど、紹介してもらったところに、輸入を受け取ってもらって。ただ、そこは私が選択的シングルマザーだということは公には知らない。日本だと婚姻関係にあるカップルにしか体外受精しないじゃないですか。病院としては、そういうシングルの人に協力したいけれども、自分たちがそういうシングルの人を認識して、医療を提供してしまうと、学会的にあまりよろしくないの、病院は仲介を、受けているの、その会社が海外からの精子を輸入して、受け取っているんですよ。そこで私と架空のパートナーが行くことにして、病院に提供する。

筆者…海外の精子バンクはどうやって探しましたか。
西川…私が選択的シングルマザーで妊娠しようと始めたときは、私が使ったデンマークの精子バンク日本では窓口がなくて、全部英語サイトだったですね。しかも、そのバンクがある国の法律で、医療機関にしか送りませんよ。個人的輸入

ができなかったですね。たまたまネットでその精子バンクが日本での窓口を設けたという記事があったんですよ。まじか、調べたら、本当に日本でそういう窓口ができて、すぐそこに連絡をとって、提供を受けて、輸入したという感じですね。

子どもは○歳で保育園に入園した。そして、両親の育児へのかかりについて、二箇所以下のように語っている。

筆者…日常生活の話ですが、起きてから寝るまで、どのように一日を過ごしているかをお聞かせください。

西川…金曜の夕方はもう祖父が娘を実家に連れて帰ります。私は仕事が終わったら、実家に向かっています。そして、金、土、日は実家で過ごして、日の夜に自分のマンションに帰って、娘と一緒に。

……
筆者…仕事と子育てとの両立は難しいですか。

西川…一人で生もうと選択したときに、両親に話しました……出産までは、一人でいたけど、産んでから実家にお世話になります。今月も子育てのために、実家の近いマンションに引っ越し

ました。

四・四 再帰的思考

シングルマザーになった後、特に育児をするなかで、自ら選んだ生き方に対して反省している。四・一節と区別するために、シングルマザーになったあとの反省を「再帰的思考」と呼ぶ。

四・四・一 自分の選択を振り返る

Aさん…「会社をやっているので、金銭的にも困っていないかった」

筆者…いわゆる「選択的」という言葉で、あなたは何を選択したのですか。

A…私の場合は、そもそもファミリーになれない関係だったというのはあるけれど、恋人にそっち離婚して、こつちと籍を入れようと言えたと思うんですよ。でも、私が言わなかった。望まなかったです……私が会社をやっているのに、金銭的にも困っていません。うことあつて、ひとりりで育てていくというのを選んだ。

Bさん…「私を後押ししているのは、経済的な基盤です」
筆者…最初から、家族を築きたいから、子どもを産

B

みたいと考えたんですか。

..そういう感じじゃない。家族が欲しいとかっていうのではなくて。こんなことって言ったら、本能的ですけれども、生物として子どもを産みたくて、子どもを育てたかった、そこにつきますよ、本当。あまり深く考えていなかった、みんなが言うほど。ただし、自分がこの考えに踏み切れたとき、後押ししているのは、経済的な基盤です。自分が自営業になって、別に一人でも生きていけるなあ。子どもはやっぱ一人二人ぐらい育てられるぐらいの経済力があつた。

四・四・二 母親役割を捉え直す

Aさん ..「本気でやる気があつたら、子どもがいながら好きなこともできる」

筆者 ..なぜ母になることを選択しましたか。

A ..私の性格として、自分が経験できることは何でもチャレンジしたいというのが、まずあると思います。私は母親になるという選択をしたけれども、だから母親業に没頭する気は全然なくて、どちらかというところ...日本の女性はまだまだお母さんになったら、会社を辞め

なきやいけないとか、お母さんになったら、自分の好きなことを諦めなきやいけないというふうは無意識的に思っている人が多分多数だと思うんですけど、そんな必要はないですよ。お母さんになっても、私は会社を経営していますし、仕事をサラリーマンよりよっぽどの仕事をしているんですけれども、仕事の出張先に子どもを連れて、〇歳で北海道に出張したんですね。だから、みんなが子どもを産んでからあきらめなきやいけないと思つてゐるということを、私が子どもを産みながら実現したい、そういう生き方もできるし、やりたければやつていいんだと示したいというのがあります...子どもを産んだことによつて、実際に苦労もあるんですけど、女性で本気でやる気があつたら、子どもがいながらも好きなこともできるという自分のステータスが作れたこともありますよね。

以上の語りによつて、選択的シングルマザーという生き方は反省、決断、実現、再帰的思考というプロセスによつて構築され、情動的である一方で、理性的であるというような矛盾に満ちている。次の節では、矛盾に満ちた選択的

シングルマザーはいかにして女性の生き方として可能にしたかについて考察する。

五 考察

五・一 経済的自立の上での情動的な選択

アメリカの女性たちが、選択的シングルマザーになることを計画するには五年から八年ほど必要であると言われる (Hertz 2006) が、それとは異なり、今回インタビューした日本における選択的シングルマザーの三人はみな、ひとりで子どもを産むことを躊躇なく決めている。また、決定過程においても日米で大きな差が見られる。アメリカでは、選択的シングルマザーになると決めた際に、女性は「想像 (Imaging)」や「秘密のテストを受け (Testing the Secret)」 「きっかけとなる (The Catalytic Event)」を経験していた (Hertz 2006)。それに対して、日本では選択的シングルマザーになる契機は個人によって異なるが、シングルマザーになったら直面せざるを得ない困難を「想像 (Imaging)」することや、職場でシングルマザーを受容するか否かを確認するための「秘密のテストを受け (Testing the Secret)」というような経験をしたことは今回のインタビューでは示されていない。日本では、選択的シングルマザーになる決定は、理性的に考えた結果というよりも、む

しろ瞬時的かつ情動的に選択したものだと言われている。一方で、そのような情動的な選択をしたことをサポートするのは彼女たちの経済力である。次に、個々人の語りから検討する。

Aさんは診察室で妊娠が発覚した瞬間に、ひとりでこの子を産むことにしている。即時的に決定したと言えよう。Aさんが自身の選択を顧みたときに、結婚や家族 (を増やすこと) の両方とも望まず、「私が会社をやっているの、金銭的にも困っていなかったということもあって、ひとりで育てていこうというのを選んだ」と語っている。ひとりで出産することは、表では一瞬に決めているが、裏には即時的な決定を支える経済的能力があると語る。

Bさんは若い頃から「せめて三〇歳に一人 (子ども) いる」とプランニングしていた。実際に、三〇歳になったとき、ふざわしい結婚相手ができていないため、出産適齢期が迫っていることに焦ってしまった。その焦りはBさんのひとりでの出産を実行する行動を促した。その際、Bさんにとってもっとも効率的な手段は当時交際していた相手の協力を得ることであった。彼氏を説得するために、結婚することを求めておらず、子どももひとりで育てていくと約束した。一回のトライで妊娠し、Bさんは選択的シングルマザーとして旅立った。子ども二人を産んだ後、Bさんは素直に「自分がこの考えに踏み切れたとき、後押ししてい

るのは、経済的な基盤」だと語っている。ひとりで出産するという決断を促すのは、表では出産適齢期が迫っていることに對する焦りであったが、裏では「経済的な基盤」だと考えられる。

西川さんは外部の刺激と内面的焦りの両方を受けたことによって、婚活をやめて妊娠に没頭した。外部の刺激は、出産した友人を見舞ったときに、子どもを可愛いと思っていることであつた。内面的焦りは、二十代後半から、結婚に焦ることであつた。実際、結婚に焦るというより、むしろ結婚しなければ子どもが生まれまいという焦りである。そして、「選択的シングルマザー」という選択肢がパツと出た時、子ども欲しい、産んでみたいという感じ」と語っている。それによって、外部の刺激による一時的な子どもが欲しいという感情を妊娠に移すことを支えるのも経済的自立であると推測できる。

要するに、ひとりで子どもを産むという決断には、情動的经验と理性的思考の併存および両者の相互作用という働きがあるが見えてきた。しかも、女性たちには、自らの決断を理性的ではなく、情動的经验として語る傾向が示された。

五・二 育児の自己責任の強化

子どもを産む自由を獲得した後、選択的シングルマザー

が直面しているのは育児という課題である。女性にとつて子どもを持つことが義務であり、自明視されてきた時代とは異なり、現在では子どもを持つことは自己選択であるという考え方が支持されるようになった。しかし、子どもを持ちたい、育てたいという欲求を人間の自然な欲求ととらえることは、「自然なもの」としてとらえられてきた母性愛と、それを根拠とする近代的母親規範を強化する可能性があると指摘されている(井上、二〇一三・二九二―二九三)。子どもを産んだ後、三人の調査対象者は、自前で育児をはじめ、選択的シングルマザーとして、育児について、仕事と育児が両立できることを強調しつつ語っている。Aさんは自身を発信する側の人間と位置づけ、SNSを通じて、〇歳の子どもを連れて出張で各地を転々としている生活を投稿する活動をしている。その活動によって、母になったすべての女性に仕事と育児を両立させるのは可能であることを発信する。彼女の行動の表は仕事と育児の両立であるが、裏では子どもを育てるのは母親の責任であるという近代的母親規範があるのではないか。

また、選択的シングルマザー家庭は、シングルマザー家庭と同じように、父親の不在という特徴が顕著である。Wright (2007)によれば、日本の家族は様々な社会的言説が規範的枠組みを構築することによって規制され、両親が法的に結婚した家族が正常で望ましい、あるいは理想的で

あると考えられている。選択的シングルマザーは自らの選択を合理化するために、経済的に自立したことで父親の不在は育児にまったく影響を与えないと語る。

Bさんは育てられた定位家族を意識しながら父親がいなくても子どもは育つと語る。Bさんの語りによれば、母親は結婚する前に一〇年働いており、Bさんにとって母親は仕事ができる人間である。母親が「これからは女がひとりでも生きていける時代」だとわかっているにもかかわらず、大勢に順応し専業主婦にならざるを得なかった。また、自分の母親が夫婦関係が悪いが、離婚したくても離婚しないのは、「自分が経済的に子ども二人を育てられない」という現実があまりに厳しいからだと考えている。そのような環境で育てられたBさんは、「子どもは父親がいなくても育つというふうに私が自分の家庭で思った」と語っている。ここで引用したBさんの語りによれば、二つのことが分かる。ひとつは、両親が揃っている場合でも、経済的な役割以外に、父親の姿がなかったこと。もうひとつは、女性あるいは母親のほうで経済的に自立することができれば、男性あるいは父親が存在するか否かが育児に差しつかえないことである。経済的自立はBさんがシングルマザーという生き方を実現するための物質的な基盤である。経済的自立によって、父親は育児から排除される。その結果、育児の責任を母親のほうを負うことになる。選択的シングルマ

ザーを選ぶ女性はシングルマザーでもカッコよく生きることを披露した一方で、育児に対する母親の責任を強化する危険がある。

五・三 押し付けられた母親役割から脱却する

彼女たちは育児の自己責任を強化する一方で、母親役割を脱するための実践を行なっている。結論を先言うと、彼女たちは結果的に母になったが、母親業／母親役割を選択することを意味するわけではない。それについては、子どもとの関係と育児ネットワークの築きという二点から考察したい。

第一に、子どもとの関係と語ったときに、「命を育てる」や「人間が育つ」という表現がよく使われている。彼女たちは、単に子どもとの関係を「母子関係」に絞っておらず、いのちの平等の視点をとった。それによって、社会に押しつけられる母親の責任や義務感を解消するようになった。子どもをケアしているにもかかわらず、単に母親として子どもをケアするのではなく、ひとりの人間としてもうひとりの人間をケアする。

しかし、われわれの社会で、生物学的関係をもつ女性と子どもとの関係をあらわす際に、「母子関係」以外の言葉がない。言葉が足りないことによって、新しい生き方を受け入れることが困難であることが窺える。

第二に、三人ともに育児ネットワークを積極的に築く。Aさんはシングルマザーとなった後パートナーやシングルファザーの友人、保育園からなる育児ネットワークを形成する。また、Bさんと西川さんは、妊娠から育児ネットワークの築きを考えはじめた。Bさんと西川さんはともに両親の協力を得るために、両親を説得した。つまり、ひとりで出産することを選択したが、ひとりで育児しようとはしない。なお、シングルマザーとして、彼女たちは積極的にシングルマザーに対する優遇政策を利用している。それによって、公的保育施設は選択的シングルマザーのネットワークの一環となる。

六 終わりに

本稿では、協力者たちの語りを①反省、②決断、③実現、④再帰的思考という流れで分析し、選択的シングルマザーは情動的である一方で、理性的である、また、思考が深い一方で、行動力があるというような矛盾に満ちた存在であることが明らかになった。さらに、矛盾に満ちた選択的シングルマザーはいかにしてシングルマザーを女性の生き方とするのか、その過程を考察した。それによって、現代社会の女性の自己選択権は社会通念や制度によって抑圧されていることがわかった。それに対しても、彼女たちは実践

によって抵抗を行っている。

第一に、選択的シングルマザーは「ひとりで子どもを産む」ことを選択するが、「ひとりで育児する」わけではない。彼女たちは育児ネットワークを築いている。第二に、海外の選択的シングルマザーは意識的にシングルマザーと区別し、価値序列で自分のことを「シングルマザーのヒエラルキーのトップ」に位置づけるが、これは日本の選択的シングルマザーに当てはまらない。むしろ、日本の選択的シングルマザーは、シングルマザーと自己認識している。これについては、彼女たちが戦略的にシングルマザーを支援するための優遇政策を利用する点から裏づけられる。

しかしながら、シングルマザーを生き方にすることを言語化する過程では、自らの正当性を主張するために、表現には一貫性に欠けるという特徴があることも明らかにされた。それは、以下の三つ点―第一に、情動的な選択を後押ししたのは経済的自立である、第二に、育児の自己責任を強化する、第三に、押し付けられた母親役割から脱却する―において示されている。そのような一貫性の欠如をもたらすことには社会では女性の就労への差別とシングルマザーへの偏見という二つの状況が重なっている可能性がある。選択的シングルマザーは働く女性とシングルマザーを重ね合わせる。それに対し、選択的シングルマザーに対する反対も複数重ね合わせうる。

そのため、問題の次元やレベルを区別せず、要素を因果関係でつながることを拒否しなければならない。たとえば、経済的自立と自己決定権との関係である。選択的シングルマザーが経済的自立を強調することは、単に貧困なシングルマザーへの偏見を解消するためだけでなく、社会に強制的に与えられる専業主婦という生き方に抵抗するためである。にもかかわらず、単にシングルマザーという生き方の成り立ちを経済的自立に帰着してはならない。強制的に与えられた専業主婦という生き方を乗り越えるために、男性に依存せず自立することが必要である。それに対し、シングルマザーという生き方は経済的自立を基盤とするのは妥当ではない。なぜなら、それによって、シングルマザーを再び貧困の文脈で捉えることに逆戻りする危険があるからである。経済的に自立しなければ、自己選択することができない、と。

個人の生き方の自己決定権は決して経済的な文脈のみに置いて捉えるものではない。然もなくば、個人の生き方の自己決定権は少数派の特権となるのではないだろうか。そうであるとすれば、フェミニズムの方向に逆行することとなる。同様に、女性と育児については、一方では、ひとりで子どもを産むことは、ひとりで育児することを意味するわけではない。近代的母親規範を超え、育児は母親だけの責任ではなく、育児ネットワークを築くことは不可欠であ

るという実践は役立つ。他方では、結婚するかにもかかわらず、女性はひとりでも仕事と育児の両立ができるということは説得力がある。

要するに、選択的シングルマザーの登場によって、シングルマザーとしての生き方を実現させた。それだけでなく、シングルマザーである女性たちは、「特別の女」ではなく、個人としての女性であることが可視化される。シングルマザーを選択するのは女性の自由であることに異論を挟む余地はない。しかし、女性を取り巻く環境はかなり複雑で、現在の苦境を乗り越えるために、主張したいことと現時点でできることの間のギャップが存在している。それを、単に女性の果てしない欲望と捉えるのは十分ではなく、それぞれが属する問題の次元を区別する必要がある。

註

(1) シングルマザーになるという決断を正当化させるための準拠枠は、「経済的正当性 (Economic Justifications)」、「道徳的正当性 (Moral Justifications)」、「宗教的正当性 (Religious Justifications)」(Bock, 2000: 70-77) からなるものである。

(2) 具体的に言えば、「想像」とは、もし女性自身がシングルマザーになったら、何か困難や非難に遭いうるのかをまず想像することである。そこでそれらの困難や非難に耐えがたいことを意識したら、シングルマザーになることをやめざるをえ

ない。「秘密のテストを受け (Testing the Secret)」とは、女性自身がシングルマザーになることが家族やコミュニティ、職場で受容されるか否かを確認するために、あらかじめテストするというものである。そして、「別れ (breakups)」や「中断 (interruption)」「親の他界 (losing a loved one)」「医療介入 (medical intervention)」「恋人との関係を固める (cementing a relationship)」ことのいずれかの理由は、シングルマザーになる決定的な契機になると考えられる。

- (3) デフォルトシングルマザー (single mother by second choice or single mothers by default) という用語は Linda Davies によって使われている。この用語は、女性たちは合法的に結婚して核家族の取り決めの中で子どもをもつことを望んでいるが、それは不可能であったため、子どもへの希望を諦めたくないということを表す。

- (4) オルタナ S は、若者による社会変革を応援するソーシャルメディアである。

- (5) <https://s.alterna.co.jp/uncategorized/58585>。

- (6) 「SMC ネット」は選択的シングルマザーのための交流サイトである。SMC ネットを運営するのは「女性と子育て研究所」という団体である。その団体は二〇一四年四月一日に発足した。
<https://www.singlemama.net/index.html>。

- (7) 西川智子さんは論文において実名で取り扱われた理由がある。わざわざメールにてその理由を述べている。ここで、そのメールの内容を載せておく。「すでにご存知かもしれませんが、今、日本では体外受精などの生殖補助医療の提供を法的な婚姻関係にある男女に限定する法律が制定されようとする動きがあ

ります。ヨーロッパの一部の国ではシングル女性への医療提供が認められていますが、その国でも過去には LGBTQ やシングルへの提供が禁止されており、段階を追って対象が拡大された経緯があります。その際、まず認められるのはパートナーがいる LGBTQ のカップルで、シングル女性は本当に最近になってからです。それは、LGBTQ の方々がこれまでたくさんの声を上げ続けた結果なのだと思います。日本が今後、同じような経緯を辿ることになるのかどうかは、私たち SMC がどれだけ声を上げるかどうかに掛かっているのではと考えており、現代日本に、SMC という独立した女性の生き方があり、現実に存在しているんだということを示すためにも、できる限り実名で活動したいと考えています。小さなことかもしれませんが、今回のインタビューについても、どこかにいる A さんではなく、西川智子のケースとして取り扱っていただければと思います」(西川さん二〇二二年六月一九日)。

文献

- 池上千寿子、一九八二、『シングル・マザー——結婚を選ばなかった私たちの性と生』学陽書房。
- 井上清美、二〇一三、『現代日本の母親規範と自己アイデンティティ』風間書房。
- 江沢あや・鈴木玲、二〇一八、「日本におけるシングルマザー、福祉改革、貧困」『大原社会問題研究所雑誌』七一一・一九・三三。
- 江原由美子、二〇二二『増補 女性解放という思想』筑摩書房。
- 神原文子、二〇〇七、『ひとり親家族と社会的排除』『家族社会学研究』

一八(二):一一・二四。

女性と子育て研究所、二〇一七、「SMC(選択的シングルマザー)とは」「SMCネットホームページ」(二〇二四年十二月六日取得、<https://www.smcjapan.net/about.html>)。

Bock, Jane D., 2000, "Doing the Right Thing? Single Mothers by Choice and the Struggle for Legitimacy", *Gender and Society*, 14 (1): 62-86.

Wright, Carolyn, 2006, "The Gendered Subjectivity of Unmarried Single Mothers in Japan", 『立命館産業社会論集』42(2): 71-84.

——, 2007, 5 Osaka: Osaka Kyoiku Toshō.